

新型インフル

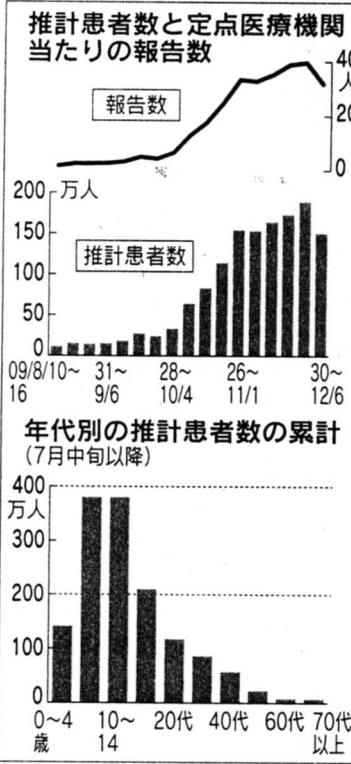
45都道府県で患者減

小中学生の減少顕著

国立感染症研究所は11日、今月6日までの1週間に新たにインフルエンザに感染して医療機関を受診した推計患者数は全国で約150万人と発表しました。ほとんどが新型とみられるが、前週から約39万人の大幅減となった。患者数は青森と徳島を除く45都道府県で減少した。厚生労働省は「まだ流行地域も多く、直ちにピークを越えたとはいえない」として今後の流行状況を注視している。

厚労省「流行、まだ高レベル」

定点観測している全国5千の医療機関から報告された患者数は計15万3131人。1機関当たりでは31・82人で、なお警戒レベル(30人)を超えているが、前週の39・63を越えているのは435地域で、前週の433地域と横ばい状態となっている。同省は「保健所単位の地域では、流行はまだ高いレベルを保っている」と警戒している。



7月からの累計患者数は約1414万人に達した。5〜9歳と10〜14歳がそれぞれ約380万人で、いずれも8割程度が感染して医療機関を受診した計算になる。次いで多いのは15〜19歳で210万人、0〜4歳で141万人となっており、20歳未満で患者の8割近くを占めている。

6日までの1週間でみると、推計患者数約150万人のうち、最も多いのが5〜9歳の約42万人、次いで10〜14歳が約30万人だが、いずれも約11万人減少した。一方、0〜4歳は約22万人で前週から約2万人の減少にとどまっている。

厚労省の中嶋建介・感

乳幼児や成人
なお警戒必要
東北大学の押谷仁教授の話 学校に通っている年齢層の子供のうち、かなりの部分はすでにウイルスに感染して免疫を獲得したとみられ、学校における流行が急速に終息すると、推計患者数約150万人のうち、最も多いのが5〜9歳の約42万人、次いで10〜14歳が約30万人だが、いずれも約11万人減少した。一方、0〜4歳は約22万人で前週から約2万人の減少にとどまっている。

染症情報管理室長は「今回患者数が減少したのは20歳未満で減少したことが大きい」と分析。そのうえで「若い世代以外では流行が進んでおらず、まだ感染していない人も多いので、このまま減少していくとは断言できない」とみている。

しつつある。ただ乳幼児や成人の年齢層では、ほとんどの人がまだ感染していない。今後、本来の流行シーズンを迎えたときに(重症化しやすい)乳幼児や成人に流行が広がる可能性があり、次の段階の対策を考えておく必要がある。

感染でも無症状18%

大阪府立公衆衛生研究所は11日、5月に新型インフルエンザの集団感染が起きた関西大倉高校(同府茨木市)の生徒や教職員のウイルス抗体の有無を調べた結果、新型インフルエンザに感染したとみられる人のうち18・4%が症状が出ない「不顕性感染」だったことを確認したと発表した。調査は8月下旬、保護者の

集団感染した大阪の高校 「季節性と割合同水準」

同意を得た生徒550人や教職員95人ら約650人を対象に血液検査を実施。98人から抗体が高い濃度で検出され、新型インフルエンザへの感染が確実とみられたが、このうち生徒17人と教職員1人の計18人には発熱やせきなどの症状はなかった。

同校では一貫教育の中学校や教職員も含め、100人以上が新型インフルエンザを発症した。